

百人一首 熱い戦い14年

幕別・江陵高

手作り札使い全校大会

【幕別】江陵高校（鈴木讓二校長、生徒348人）は、全校百人一首大会を継続して取り組んでおり、今回で15回目となった。楽しく古典を学習する機会をつくろうと始めたもので、使う札も生徒たちが例年手作りしている。関係者も「この規模の学校が全校レベルで百人一首に取り組む例は珍しい」と驚いている。

今年12日に開催。十かけて戦った。

勝下の句かるた協会（島田一敏会長）のメンバーらが上の句から読み上げると、至る所から札を取るバンという音とともに歓声が湧く。体育館は生徒でびっしり。1チーム2、3人が40カ所に分かれ対戦、予選トーナメントを経て、決勝トーナメント、敗者復活など1日かけて戦った。きつかけは当時の国語教諭が授業で百人一首の詩を指導していた際「せっかくなので学習したのでかるた取りも体験しよう」と、授業内で取り組んだこと。当時、書道担当教諭で書家でもある鈴木校長が指導して授業で札の製作を進め、2001年2月に第1回を開いた。

同校では入学後、生徒全員に百人一首ファイルが渡され、歌の全文と意味、札を一覧にした資料などが渡される。大会に向けて授業では6時間程度、練習に充てている。また、札だけで40組分ほどあることから、古くは

ったり、足りなくなったりした札を毎年、書道の授業で製作も続ける。「独自に練習を重ね、上の句を読んだ瞬間に取る生徒も。古典やくずし字を効果的に学べている。今後も続けたい」と国語・書道担当の石原伸弥教諭（28）。入学後初めて百人一首に触れる生徒も多く、東納ありささん（2年）は「予選で負けてしまったが、こんなに楽しいとは思わなかった。来年はリベンジしたい」と笑顔を見せる。また、昨年から生徒が読み手を務める場面もつくするなど取り組みを「進化」させている。

協会の人たちも見守る中、読み手の声を真剣に聞く生徒たち

大きなプラスになる。卒業してからも続けて仲間になってほしい」と話している。（佐藤いづみ）

